

【17】現場作業員の厳しさ、困難さを示す現場状況・声

平成23年3月11日、特に津波が襲来し、全交流電源が喪失して以降、現場作業員は様々な困難に立ち向かっている。

今回の事故に関し、調査を徹底する中で、ヒアリング・ディスカッションを実施する中で、現場作業の厳しさ、困難さが浮き彫りになってきた。

以下に、当時の状況に係る証言や写真を掲載する。

【中央制御室責任者の対応】

- 平成23年3月11日、14時46分、巨大な地震が、福島第一原子力発電所を襲った。地震の時は、机にしがみついて、運転員に掴まるよう声をかけて我慢した。
地震がおさまってすぐに、スクラムした状況は、自席からグリーンランプが見えた。
非常用電源（D/G）が起動し、回っているのを確認し、中央制御室のパラメータもOKという報告を受け、このままいけると思った。
- その後（津波が襲来した時刻頃）、電源のランプがフリッカし、一斉に消えていくのを目前で見た。
非常用電源が止まり、中央制御室のパネルのランプが、バタバタと消えていく状況だったが、何が起きたのか分からなかったが、津波によるものとは思わなかった。
操作員が、「海水が流れ込んできている」と、中央制御室に大声で叫びながら戻ってきて、津波の襲来を知った。
- 津波の流入と同時に、非常用電源が使えなくなり、中央制御室の照明も、一つ非常用灯（薄暗いわずかな照明）があるのみとなった。
- **電源を失って、何も出来なくなったと感じた。**
他の運転員は、不安そうだった。「操作もできず、手も足も出ないのに、我々がここにいる意味があるのか」と紛糾した。
そこで、自分がここに残ってくれと頭を下げ、了解を得た。
- 中央制御室で放射線量が上昇したため、当直長は、チャコールフィルタ付全面マスクと防護服を装備するよう指示。放射線量の低い2号機側に寄せ、監視等を継続した。

【暗闇の中、原子炉建屋に機器の作動確認へ】

- 発電所緊急対策本部から、中央制御室にいた私は、R C I Cの動作確認を依頼されたが、確認作業は容易ではなかった。
セルフエアセットを着るのに10～15分、活動時間が30分、戻ってからセットを外して中央制御室へ報告に行くという余計な手間がかかり、通常数分で確認に行けるところ、45分～1時間位要した。
確認作業でも、結果して、通信手段があればここまで時間を要することはなかったと思う。また、余震が頻発して、津波が発生するおそれもあった。



<セルフエアセット>



<真っ暗な中での作業>

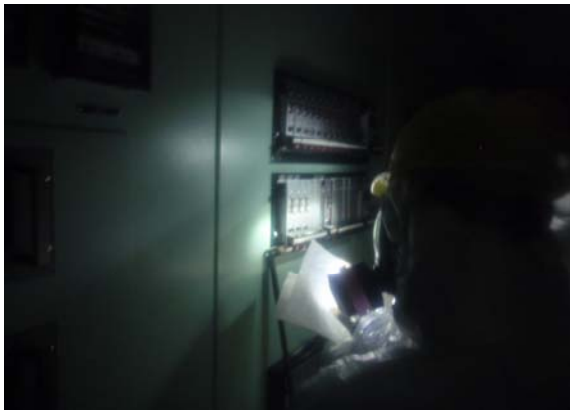
サービス建屋入口を建屋内から撮影。床にも散乱物あり

【ベント作業の困難さ】

- ベント作業が、電源を喪失したことから、手動で弁の開放作業をせざるを得なくなった。
しかし、現場での開放作業では、高線量被ばくのおそれもあり、ベントに行ける人間を書き出して、当直長をそれぞれ割り振るように編成した。
完全装備とはいえ、放射線量が高い中を行かせるので、若い人には行かせなかつた。
- ベント弁の開放作業のため、現場に出かけた。その際、トーラスに近づいた際、ポコッ、ポコッという大きく、不気味な音が聞こえた。弁が、一番上の物であったので、トーラス部分に足をかけ作業をしようとしたら、黒い長靴がズルッと溶けた。

当直副長の監視

当直副長席の状況。
真っ暗の状態でも全
面マスクをつけて
監視



指示値の確認

真っ暗な中、ライトの明かりを頼りに
指示値を確認

【その他】

- 相当大きい余震があり、全面マスク着用のまま死に物狂いで、高台へ走っていかざるを得ないことも多かった。
- 電源を喪失した中で、計器類を復旧するには、バッテリーしかないと思い、収集活動を開始した。
バッテリーの運搬は、重くて大変だった。あれ以上の悪条件は無いのではないかと。
- 通常であれば、ケーブルの敷設作業は、1・2ヶ月を要するが、数時間でやり遂げた。
また、暗闇の中、敷設のための貫通部を見つけたり、端末処理を行う必要もある。水たまりの中での作業で、感電の恐怖すらあった。

仮設計器電源

電源がないため、仮設バッテリーをつないで計器用電源として使用



仮設電源敷設

ケーブルの引き回しは、電気関係以外の社員も動員して人力で実施



アクセスルートの障害物

アクセスは消防ホース等を迂回。爆発後は、瓦礫、損傷した消防車が障害物としてさらに追加



以上